

世界状況を正視する視点の話しに感銘

日本 AALA 機関誌一月号に掲載された国際政治学者、羽場久美子さんと日本 AALA 代表理事の宮城恭子さんの「新春対談」に大きな反響がありました。そのうち北海道 AALA の機関紙で紹介された 2 人の会員の感想を紹介します。

感想 1 一福原正和さん（北海道 AALA 理事 医師）

札幌の一会員です。1 月 1 日付け機関誌を読み、羽場久美子さんの事を知りました。まさに今の世界状況を正しく見る視点でお話ししていることに感動・感銘致しました。

羽田さんの事を全く知らなかったのを恥じるほどです。この方の紹介に感謝致します。

私が今、貴重な情報源として考えている安斉育郎氏、孫崎享氏とともに、これから羽田さんのフォローをして彼女がどのような発言をするか見ていきたいと思えます。これからも貴機関誌での紹介も期待します。

ありがとうございました。

ついでながら、

付け加えれば、私の尊敬する女性の第一は国連軍縮委員会上級代表の中満泉氏です。国連総会でサー口節子さんを支えて核兵器禁止条約成立の中心人物だと思っています。

中満泉さんの名前は以前から知っていましたが、羽場久美子さんの名前は存じ上げず、これから彼女を「追っかけ」をしたく、まずネットで彼女の著書を買いました。

中満泉さんの北海道での講演会は難しいと思いますが、羽場久美子さんは北海道 A A L A 60 周年記念講演にも検討頂きたい方だと思っています。

感想 2 影山あさ子さん「ガザから沖縄を考える」

影山さんは、沖縄を拠点にドキュメンタリー映画の監督として活躍し、日本 AALA の理事も務めています。以下は頂いた感想の要約で。全文は北海道 AALA 機関紙に掲載されていますので希望の方はそちらへどうぞ。（北海道 AALA 機関誌編集部）

実にまっとうな羽場さんの主張

最近アラブの世界を知る機会がありました。「私たちは、この地球の半分ぐらいの世界をほとんど無いものとして暮らしている」と実感します。遮断され、隔離された世界の中にいるのだと。

昨年 10 月以来のガザ、すでに 2 年が経とうとしているウクライナでの戦争の伝えられ方にも、同じものを感じ続けています。ハマスやパレスチナ、ロシアやプーチン大統領の側について十分に伝えられることはなく、一方の主張が常に流され続けていると。

羽場さんの対談の記事は、実にまっとうな言論を目にした思いがします。

2005 年に「Marines Go Home」をつくった時、辺野古の新基地を止めれば日本が戦争する国になるのを止められると思っていました。そのための力になりたいと願っていました。20 年たった今、辺野古の新基地はまだつくられていません。しかし、琉球弧（南西諸島）は自衛隊の基地だらけになりました。馬毛島、奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島、与那国島。今や全部、自衛隊の基地です。

沖縄と戦争

「基地をつくるのには目的があります。戦争することです」と2014年に伊波洋一さんが話してくれました。その通りです。計画されているのは、中国を封じ込め、アメリカの覇権を維持するために、日本の自衛隊がアメリカのために、日本の国土を戦場に、核保有国・中国と対峙する戦争です。琉球弧は、その最前線です。

沖縄はかつての戦争で、本土決戦を先延ばしにするために捨て石とされました。今度は本土を戦場にしたくないアメリカのために、日本列島が消耗戦の舞台となる戦争が準備されています。その主戦場が琉球弧なのです。自国を戦場にして中国と戦争をしなければならない理由など私たちにはありません。沖縄でも、日本のどこでも、中国も台湾も大事なお客さんで、友人で、ビジネスパートナーです。

ガザに共通する恐怖

羽場さんも話されているように、ウクライナの戦争には、戦争に向かう状況を作り上げていったアメリカやNATO諸国、ウクライナがあります。羽場さんは、自国領内でクラスター爆弾や劣化ウラン弾を使うウクライナについても触れられていますが、今、琉球弧を主戦場に計画されている戦争は、まさにそのような戦争です。

ガザから日々伝えられるニュースは、恐怖です。宮古島や石垣島からミサイルが発射されれば、今、ガザで起きていることがいつでも島々の現実になるからです。

ミサイルが降り注いでも、海で囲まれた島々から脱出する方法はありません。島々で自衛隊基地の建設に反対してきた人たちも、「島を出るべきか。いつ出るべきか」と考え続けています。

宮古島で建設が計画されているシェルターの定員は、4千5百人ですが、島には5万人以上の住民がいます。宮古島市の公共施設には、すでに遺体収容袋が備えられていることも、宮古島の住民・清水早子さんの調査で明らかになっ

ています。最近の日米の軍事演習では、野戦病院の設置、死傷者の搬送、遺体の仮埋葬の訓練も行われています。

有事の際、住民避難は自治体の責任とされていますが、この正月に能登で起きた地震を見ても、避難の困難さは明らかです。水も食料もなく、移動も出来ない。放置されれば弱い者から死んでいきます。地震と一緒に原発事故が起きなかったことは、不幸中の幸いでしたが、有事となればミサイルが飛んできます。「軍民が一緒だと攻撃の対象になる」とのことで、自衛隊は住民避難に関与しません。

実際、有事の際に有効な避難の手立てなど、あるのでしょうか。沖縄県民は150万人。避難訓練が沖縄の各地で実施されていますが、避難先はイオンの地下駐車場や公民館。台風と同じです。宮古島や石垣島からは、船や飛行機で九州に避難することになっていますが、移動方法の詳細も、受け入れ先も不明です。与那国島の町長は、町が避難費用を支給するので「自力で脱出してくれ、各自で生き延びてくれ」と言っています。最も人口が多い沖縄島は、屋内避難です。

仮に避難できたとしても、災害続き、また有事のただ中の日本のどこで、島の人たちは暮らせばよいのでしょうか。私たちは、どこでどうやって島々の人たちと一緒に生きていけば良いのでしょうか。

戦争を止めるために

島々の軍事化の様相も、住民の危機感も、休みなく続く日米の軍事演習の事も、マスメディアは伝えません。伝えないなら、私たちがやるしかない。今、琉球弧を馬毛島から与那国島まで、撮影を続けています。5月には1時間の作品として完成させる予定です。

戦争を止めるのは、戦争が始まる前、今しかありません。そして戦争を止めるのは、本気の意味と行動です。市民一人一人の行動が、未来を救う希望です。この希望を大きなものに変えていくために、この作品を作ります。ぜひ、皆さんのお力添えをお願いします。

非戦こそ安全の保障

羽場さんの話の最後の方に、沖縄県の自治体外交の話があります。私たちが心に留めておかなければならないことは、私たち道民も国境の民だという事だと思います。沖縄の問題ではなく、私たちはどうするのか？ということです。

隣国はロシアです。北海道は自衛隊の基地だらけですが、国境のすぐ脇で日米の軍事訓練を行い続けています（戦争前のウクライナのようにですね）。

2019年、米ソの間で結ばれた中距離核戦力（INF）全廃条約が失効し、アメリカは、新型中距離ミサイル（射程500～5500キロ）を北海道から沖縄まで日本の各地に配備するとロシアに伝えました。それに対してロシアは、ミサイルが配備されれば「そこにロシアのミサイルが向けられる」と答えています（2019年10月3日琉球新報）。

一昨年、12月に宮古島で開かれた講演会で伊勢崎賢治さん（東京外国語大学名誉教授）が、国境地域の非武装化が最も現実的な戦争回避の策だと話されていました。仲良くしなくてもよい、軍備も放棄しなくてもよい、しかし国境は非武装にと。傾聴すべきお話でした。

南アフリカとイラクのこと

何もかも、最近ひどいニュースばかりですが、それでも、「おっ——！」と思うニュースが二つありました。

一つは南アフリカが、国際司法裁判所にイスラエルを「ジェノサイド行為」で訴えたことです。すごい！と思いました。今できる最大級のことでしょう。南アフリカ現大統領、シリル・ラマポーザは、南アの鉱山労働者組合をつくった人です。北海道 AALA で反アパルトヘイトを中心に取り組んでいた頃は、COSATU（南アフリカ労働組合会議）の代表だったと記憶しています。友人たちの国は、今日も闘っていました。

Nkosi sikelel' iAfrika！（アフリカに神の祝福あれ！）

私たちがこれからも、南アフリカの人たちの友人であり続けられますように。

もう一つは、イラク。サッカーのアジアカップ予選で、日本代表に勝利した試合もすごい！と思いましたが、それではなくて「駐留米軍、“撤退”か？」のニュースです。

1月6日、日経新聞や東京新聞が、「イラク首相府は5日、国内に駐留する米軍主導の有志連合軍の完全撤退に向けた手続きに着手すると発表」と報じました。

日経には「イスラエル軍とイスラム組織ハマスの戦闘開始以降、イラクやシリアの駐留米軍は親イラン組織から攻撃を受け、米軍は報復として空爆などを繰り返している。イラクは自国領内への空爆を『主権侵害』と非難し（中略）...イラク首相府は声明で『有志連合軍の存在を正当化する理由はなくなった』と主張した」と書かれていました。

朝日や他の各紙の報道も「イラクの駐留米軍、今後を両国協議へ」と続いています。

出て行けと言われれば、米軍は出て行く！（のか！？）（続報と詳しい方の解説を期待します）

2024年1月28日記